

中間構文と創造動詞について

On the Middle Construction and Verbs of Creation

小野 雄一

Yuichi ONO

1 中間構文(the middle construction)¹は一般に次の特徴を兼ね備えていると考えられている。

- (1) a. 本動詞が他動詞である
- b. 意味上の目的語が主語の位置に現れる
- c. 意味上の主語は表面上存在しない(ただし implicit Agent の解釈は必ず伴う)
- d. 時制は単純現在時制である
- e. 総称的(generic)な解釈を受ける
- f. ある種の副詞を伴うことが多い

中間構文はこのような特徴が備えていればかなり自由に成立し、極めて生産性が高い構文であると考えられる。いくつかの典型的な例を以下に挙げる。

- (2) a. This book sells well.
- b. The floor paints nicely.
- c. The book translates easily.
- d. The car drives comfortably.
- e. She doesn't photograph well.

ところで、knit, draw, build, write などのような英語の創造動詞(verbs of creation)は中間構文に関して興味深い問題を提起する。英語においてこれらの動詞から中間構文をつくることはできない。

- (3) a. *Wool sweaters knit easily. (Nakamura 1997)
- b. *Houses build easily.
- c. *Pictures draw well.

また、次の例に示すように、同じ動詞 dig でも、創造動詞としての用法、つまり、その目的語が行為の結果作り出されたもの、いわゆる結果目的語(effectum object)か、あるいは既存していた物体が動詞によって表される行為の働きかけを受けるもの、いわゆる被動目的語(affectum object)かによって中間構文の可能性が変わってくる。

- (4) a. He digs a ground. (被動目的語)
 b. The ground doesn't dig easily.
- (5) a. He digs a hole. (結果目的語)
 b. * A hole doesn't dig easily.

創造動詞はアスペクト的には中間構文を広く認める 'accomplishment' と一般的には分類され², 意味的には「状態変化動詞(change of state)」という分類を受ける。典型的な状態変化動詞には break, open, shut などがあるが, これらは完璧に中間構文を形成する。

- (6) a. The door breaks easily.
 b. The door opens only with great difficulty.
 c. The door shuts easily.

このことは, 伝統的なアスペクトによる分類や, 状態変化動詞という枠組みでは創造動詞の中間構文に対する振る舞いを説明できないことを示している。

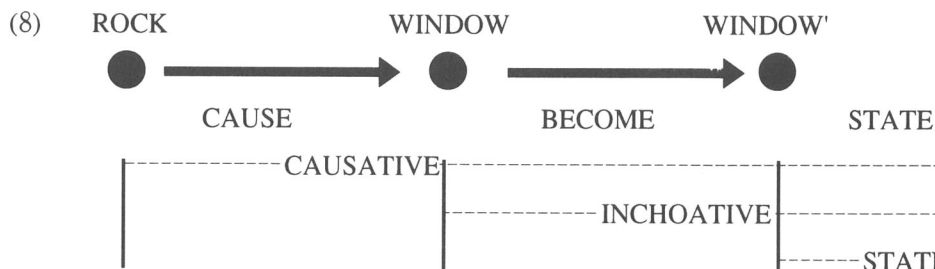
本稿ではいわゆる創造動詞がなぜ中間構文と馴染まないのかについて検討する。中間構文の研究は非常に盛んで, 比較統語論(comparative syntax)的にも非常に興味深い事実が出てきていると言える。諸言語のヴォイスの問題を扱う上で中間構文は避けて通れない問題であるのは明らかである。しかし, 英語の中間構文の振る舞いについて十分な記述が行われてきたかと言えば残念ながらそこまでは達していない。とりわけ創造動詞の問題については十分な注意が払われてこなかったと言わざるを得ない。

認知言語学の立場から中間構文の分析を試みたもので Taniguchi (1994)がある。いくつかの認知的原理から中間構文の体系を説明しようとしたものであるが, 本稿ではまずこの分析に批判的検討を加えたい。具体的には Taniguchi が提案する「認知モデル」に基づく説明は英語の創造動詞の分析に対しては不必要であることを述べ, 英語言語内の独立に必要なとされる諸制約の中で説明が付くことを示していく。

2 Taniguchi (1994)は, Langacker (1990)で示されてた「ビリヤードモデル(billiard-ball model)」と呼ばれる考え方に基づき, 事象(event)は例えば行為者, 道具, 対象物などといったいくつかの独立した participants の相互関係によって捉えられるものとしている。一般に行為が遂行されるときに, 行為者が道具を用いて対象物に働きかけ, そして, その結果ある状態が発生するといった一連のエネルギーの移動が考えられる。このエネルギーの「連鎖(chain)が語順などの文法現象に影響を与えると仮定した。さらに Croft (1990)は Langacker と同じような視点から「使役連鎖(causal chain)」というモデルを提案した。Croft によると, いわゆる事象(event)は CAUSE, BECOME, STATE の3つの segment から構成し, いわゆる CAUSATIVE, INCHOATIVE, STATIVE などの述語の選択はこの3つの segment のどこを言語化するかによって決まると主張する。例えば次の(7)のそれぞれの例文は(8)のモデルによって表される。

- (7) a. The rock broke the window.
 b. The window broke.
 c. The window is broken.

中間構文と創造動詞について



ここまで概観してきた Langacker や Croft によって提案されてきた連鎖モデルが中間構文にも適用されると Taniguchi は主張する。中間構文において行為者は一般的に総称的な解釈を受ける。言い換えれば行為者に大きな焦点が当たらないことになる。そのために行為者という役割は figure-ground relation における figure の資格を失い、主語として具現化されなくなる。一方、エネルギーの流れにおいて (Instrument がなければ) 次にエネルギーの受け手となるもの (いわゆる Patient, Mover などのようなもの) が figure の資格を得ることになり、主語の位置に具現化される。このようにして中間構文の総称的解釈と意味上の目的語が主語の位置に出現するという現象が統一的に捉えられるわけである。

では創造動詞についてはどのように言うのかを考えてみる。創造動詞の場合、動詞によって表される行為を行う際に目的語として具現化される対象物は存在していない。この目的語の「既存性」について次の (9) のように述べている。

- (9) a. "the action chain of these verbs is deviant from the normal transitive chain in that its intermediate segment is null; the objects of creation, ..., does not appear until energy flow reaches the final STATE segment (p.191)"



Taniguchi の分析では創造動詞が中間構文を形成しないのは、行為者からのエネルギーの受け手が存在していないために、エネルギーの流れが途絶えてしまう、結局のところ連鎖自体が成立しないからであるという連鎖に関する一般的な原理から導き出しているところがポイントなのである。

3 Taniguchi の分析で採用している Langacker や Croft の認知モデルは人間の一般的な認識の傾向に基づくものであり、事象の認識の方法、例えば、エネルギーの流れなどのようなものの認識の方法が言語によって大きく異なるとは考えにくいという意味で、普遍性が強いものと言える。これがある言語で矛盾のないものであれば、一見その言語の現象を見事に捉えているように見える。しかし、例えば英語で成立するこの種の分析が「人間一般の言語能力の解明」を目指す言語学の観点から見るとどのように見えるのか、という視点で見直してみると、このモデルの妥当性に疑問を投げかけるいくつかの事実が思いつく。そのいくつかをこの節で述べていく。

まず一つは、これだけの普遍性の高いモデルが英語以外の言語で成立しないとすると、なぜその言語で成立しないのかを同様に高い普遍性のレベルで説明できない限り、モデル自体の存在意義が問われることになる。創造動詞から中間構文は形成されないのは英語においては常識的な事実である。しかし、例えば、フランス語やドイツ語、日本語などではこれらの動詞からの中間構文は自由に成立する。

- (10) a. Diese Brücke baut sich leicht.
 b. Den Roman schreibt sich leicht. (Fagan 1992)
- (11) a. Ce genre de pont se construit facilement
 b. Ce genre de poème s'écrit facilement
 (Fellbaum and Zribi-Herts 1989)
- (12) a. この橋は簡単に建てられる.
 b. この種の小説は簡単に書ける.
- (13) a. * This type of bridge builds easily.
 b. * The novel writes easily.

英語話者と他の言語の話者との間に状況認識において大きな差があるとも思えず、英語で成り立つ認知モデルがなぜ他の言語では成立していけないのかという大きな疑問が残る。それぞれの言語における大きな原因があつてこれらの言語では創造動詞からの中間構文が可能になっているという積極的な理由が見つからない限り、Taniguchi の英語に対する分析も疑問視せざるを得ない。

また、英語内部においても Taniguchi の分析に疑問を投げかけるデータを見つけられる。それは創造動詞とは対極をなすと見られる破壊動詞(verbs of destruction)である。英語における破壊動詞 destroy は創造動詞と同様、中間構文を認めない。

- (15) * This cathedral destroys easily.

興味深いのは、創造動詞の場合と同様に英語以外の例えばドイツ語やフランス語、日本語では完璧に認められることである。

- (16) Diese Kathedrale zerstört sich leicht. (大矢 2000)
 (17) Un pont, ça se détruit facilement, il y suffit d'un gros orage. (Ruwet 1976)
 (18) この古い城は簡単に破壊される。

Taniguchi にとっては(15)の不適格性を、さらに、(16)~(18)の適格性を説明しなくてはならない。特に(15)に関してはビリヤードボール認知モデルにとっては大きな問題である。つまり、エネルギーの受け手である対象物は他の中間構文が認められる文と同様にすでに行為時点で存在しているのにも関わらず、中間構文が認められないという事実が存在するのである。仮に、「行為の結果その対象物が消滅してはいけない」などといった制約を認知モデルに付加させることで対処することも選択肢としては可能かもしれないが、それができたとしても次になぜドイツ語フランス語日本語ではそのモデルが適応されないのかという大きな問題が残ってしまう。

以上のように見てみると、Taniguchi が提案する普遍性の高い認知モデルは比較言語学的に問題を提起するばかりでなく、英語内部においても不十分であると結論づけられる。

4 創造動詞と中間構文の関係をどのように捉えるか。認知モデルのような普遍性の高い原理から導き出そうとする試みは、先の例で見たように、言語間の差異を説明できなくなるために避けた方がよい。しかも、創造動詞が認められないのは英語固有の特徴と見ることができる。したがって、この問題を解決するための基本的な方向性としては、創造動詞を含めた状態変化動詞は一般に中間構文が可能であるとし、英

中間構文と創造動詞について

語で認められないのは英語内部の何かが創造動詞の中間構文を不可能にしている, と考えるのが望ましい。では, 英語において創造動詞の中間構文を不可能にしているのは何か。

一つの大きなポイントは, 他の種類の動詞と違って創造動詞はその目的語に対して意味解釈に制約があるという点が挙げられる。Diesing (1992)では, 不定名詞句の意味解釈が創造動詞と他とでは異なる点を指摘する。

- (19) a. I usually read a book by Robertson Davies.
b. I usually buy a picture of the Chiricahuas.
- (20) a. I usually write a book about slugs.
b. I usually paint a picture of Barbary apes.

(19)は非創造動詞(Diesing は Verbs of Using と呼んでいる), (20)は創造動詞の例である。(19)では Quantificational な読みと Existential な読みの両方が可能であるのに対し, (20)では Existential な読みしか認められない。また, ACD (Antecedent Contained Deletion)についても両者で違いが出てくる³。

- (21) a. I usually read books that you do.
b. Evelina usually buys pictures that Egbert does.
- (22) a. * I usually write answers that you do.
b. * I usually draw animals that you do.

特に注意したいのは, (22)は語用論的な理由で排除されているのではないと言う点である。Diesing (p.111)では次のような記述がある。

- (23) Though it might be hard to imagine two people writing the same books, it is perfectly plausible that two people should write the same answers on a test.

つまり, 状況的語用論的には想像できる状況である。つまり(22)は状況が英語話者によって正しく認識されないから非文となるのではなく, 英語という言語内の文法的な理由から排除されているのである⁴。

また, 影山(1996)では, 創造動詞の特異性として創造動詞が反使役化を受けないという事実を観察している。

- (24) a. He made an error. *An error made.
b. They build a new house. *A new house built.
c. She baked a cake. *A cake baked.

(p. 161)

ここで影山が仮定する具体的な語彙概念構造の分析には立ち入らないが, 上の例と同様, 創造動詞に対する制約が独立にこの場合は語彙概念構造の内部に存在していることを示している。

もし創造動詞という動詞類が中間構文のみにおいて大きな意味を持つ現象であるのならば, 中間構文の問題として捉えるべきこととなるのだが, 今見たように, 英語という言語において, 創造動詞に対する制約が適用されるのは中間構文の時だけではないことがわかる。つまり, 創造動詞に対する制約が中間構文

とは独立に存在すると考えられる。となると、「創造動詞」というカテゴリーがこれらの制約を認めるためにいづれ必要であるわけだから、中間構文に関わる創造動詞の制約を英語の middle formation の中に組み込まれている仮説を立てることは無謀な試みではないはずである。つまり、中間構文の一般的な特性が英語の創造動詞を排除しているのではなく、創造動詞のさまざまな語彙特性が英語の中間構文を排除していると考えべきなのである。そのように考えると、英語だけに存在している中間構文における創造動詞の制約を、わざわざ他の言語にも大きく影響する普遍性の高い「認知モデル」に還元させる必要は全くなく、独立に存在する英語内部の語彙的特異性に基づく原理から導き出すべきなのである。

5 本稿では、Taniguchi が認知モデルに基づいて提案した中間構文の分析に批判的検討を加えた。創造動詞が中間構文を認めないのは、比較言語学的には英語固有の問題であり、Taniguchi が提案するような普遍性の高い認知モデルでは言語間の差異を説明できなくなってしまう。「創造動詞」に対して存在するさまざまな制約を概観した上で、ここでの問題は英語内部の文法の問題として捉えるべきである点を述べた。

認知言語学は従来の枠組みでは見落とされた多くの現象を思い出させたという意味で大きな成果をもたらしてきたと思う。しかし、英語中心の研究であったことは否定できない。よって我々の今後の課題は、これまでの認知言語学の成果に敬意を払いつつも、その成果が「人間の言語能力」にどう関わるかを調べることである。認知言語学が今までに取り扱いきれなかった一つの大きな視点は「比較言語学」的視点である。英語では説明ができた原理原則が他の言語でも説明ができるのか、大きな研究テーマである。多くの言語で繰り返し観察できるヴォイスの現象は人間の言語能力を解明する上で大きな手がかりとなる。中間構文はそのような意味でも重要な領域であることには違いない。このように考えると、中間構文の研究にはまだまだ多くの課題が残されていると言わざるを得ない。

Notes

1. ドイツ語学で *Mittelkonstruktion*, フランス語学で再帰代名詞の中間的用法(*moyen*)などによばれるものに対応する。日本語は印欧語とヴォイス体系が大きく異なるために「中間態」という用語が伝統的な日本語学では定着していないように思えるが、寺村(1982)が述べている「可能的受動表現」を本稿ではイメージしている。
2. Vendler の4分類を仮定している。Fagan(1992)に従って、*action verb* と *accomplishment verb* は中間構文が可能であるという議論を考えている。アスペクトの議論についての詳細は Fagan (1992)を参照。
3. ちなみに破壊動詞 *destroy* の ACD もすわりが悪いという報告がある。 ? I usually destroy pictures that you do. (Diesing 1992)
この非文法性が創造動詞のと関係があるかどうかについてはまだまだ検討が要と思われる。
4. 創造動詞の何がこのような不適格性を導いているのかについては、まだまだ検討が要る。Diesing(1992)では名詞の *specificity* の観点から創造動詞の特性を説明しようとしている。また、Nakamura (1997)ではなぜ創造動詞が中間構文を拒否するのか、統語的な説明を試みている。本稿ではスペースの関係で彼らの分析の検討は割愛する。いづれにせよ、これらの例は創造動詞に対する文法的な制約があるという事実を示していると言える。

References

- Croft, William (1990) "Possible Verbs and the Structure of Events, " *Meanings and Prototypes: studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas L. Tsahatzidis, 48-73, Routledge, London.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites* MIT Press, Mass.
- Fagan, Sarah (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Fellbaum, Christiane and Anne Zribi-Herts (1989) *The Middle Construction in French and English*. Indiana University Linguistics Club, Bloomington.
- 影山太郎(1996) 「動詞意味論--- 言語と認知の接点」 くろしお出版
- Langacker, Ronald W. (1990) "Settings, Participants, and Grammatical Relations" *Meaning and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas L. Tsahatzidis, 213-238, Routledge, London.
- Nakamura, Masaru (1997) "The Middle Construction and Semantic Passivization" *Verb Semantics and Syntactic Structure* ed. by Kageyama, Taro. Kuroshio Publishers. Tokyo.
- 大矢正明(2000) 認知意味論と中間構文---ドイツ語と英語の差異をめぐって
「ドイツ文学 104 号」 42-52
- Ruwet (1976) *Problems in French Syntax* Longman. London.
- Taniguchi, Kazumi (1994) "A Cognitive Approach to the English Middle Construction" *English Linguistics* 11 173-196
- 寺村秀夫(1982) 「日本語のシンタックスと意味」 くろしお出版

「受理年月日 2001 年 9 月 28 日」

